

論文

## 「英会話講座」から多文化交流の「場」へ

——亀岡市におけるグローバルセッションの転換——

児 嶋 きよみ\*

## はじめに

グローバル化と、1990年代におけるニューカマーの増加による「内なる国際化」に伴い、地域社会における多文化共生の推進、すなわち多文化教育や人権教育、在日外国人に対する支援、多文化交流の場づくりが求められるようになった。生涯学習もそのような多文化共生社会の実現のための場のひとつとして注目されつつある。

日本社会教育学会は1995年に『多文化・多民族共生社会と生涯学習』を上梓し、多文化共生社会に向けた教育課題の総論から外国人に対する日本語学習支援活動、マイノリティの差別や排除に抗する諸外国の実践まで、多文化教育・多民族共生に向けた生涯学習の実践と課題を体系的に整理した（日本社会教育学会1995）。また市民向けの生涯学習における多文化理解・交流のユニークな実践例に関する報告も積み重ねられつつある。たとえば、在日コリアン一世の生活史を題材としたK市の国際交流協会「識字ボランティア講座」（矢野泉2000）や、川崎市の市民館での日本語教室における生涯学習と異文化・異民族間の共同交流学习（文2000）などの報告がある。

しかし教育学者の矢野裕俊（2004）が、「共生社会への展望と生涯学習の課題」と題した小論において指摘するように、学習社会の実現と「社会的排除」との闘いを共通の政策課題に据えて生涯学習の在り方を議論してきたEU諸国とは異なり、日本型の生涯学習の主流は個人の自己実現や自己の教養的向上の手段として実施されている。とりわけ、市民向けの自己実現・教養的向上を目指した英会話講座などでの多文化理解・多文化交流を扱った研究は、いまだ十分に展開していない。

この背景には、生涯学習の英会話講座を扱った従来研究は、指導法や学習法（加藤2002）、英語を学ぶ人々のニーズや学習動機（糸井2007）、高齢者のニーズに即した英語学習環境の考案（糸井2005）など多岐にわたるものの、英語の学習効果や自己実現、生きがいに重点をおいており、多文化理解の場づくりとそれを通じた異文化・他者理解については、そこから派生する副次的な課題として仮定される傾向にあったためである。

近年、大学教育における外国語教育の分野では、英語力や英会話能力の向上だけでなく、それを通じて、国内に偏在する身近な異文化理解、外国人留学生等との多文化交流に取り組む姿勢をいかに醸成するかが問われるようになった。例えば、溝上・柴田（2009）は、異文化理解体験に重点をおいた外国語教育を実践することは、言語や文化の多様性を認める態度の養成につながり、将来のキャリア形成の一助となると述べる。また、学習者と教師を対象とした異文化理解の重要度に関する意識調査では、学習者のほうが重要だとの意識が高いことも報告されている（藤原2012）。その結果、英語を実用とする学びの方法として上級学年や大学院生をファシリテーターとして活用する方法（田中2011）や、異文化交流という壁の前で構える学生に対してグループ討議や、情報の事前共有のあり方を提案する研究（川那部2006）もなされている。ただし、加藤優子（2009）が述べるように、大学の英語教育の中で、異文化間交流を導入すれば、英語学習に対するモチベーションをあげることは可能であるが、英語運用の技能を高めるには、十分な時間の確保が必要であるなどの問題が生じる。

---

キーワード：生涯学習、多文化共生、英会話講座、グローバルセッション、セルフヘルプグループ

\*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2011年度入学 共生領域

また、近年では、国際共通語としての英語論（本名・ホッフア・竹下 2009）やグローヴィッシュ（Nerriere・D.Hon 2009）等、欧米の英語規範に基づく学習法を批判的に捉え、「英語を理解できないのは、非ネイティブ英語話者の責任である」というネイティブ英語話者の考え方に対する見直しを叫ぶ議論もみられるようになった。複言語主義を取る EU を参考に、異質な文化に接するときに、自分の文化と相対化させて理解するという能力としての異文化能力を考えようという動きが大学でも見えてきたとする見解もある（鳥飼 2012）。

ただし、国際英語論やグローヴィッシュについては批判的な見解もあり、特に大学等の高等教育を提供する場では、効率的で専門的な英語能力の向上を希望する学生もいると想定されることから、いまだ構想や提案段階にある。語学学習を生涯学習として長期的な視野で考える必要性は指摘されている（中田・木村・八島 2003）が、市民向けの生涯学習講座は大学等の高等教育とは異なる可能性を持つと考えられる。牟田（2013）は、生涯学習センターにおける日本文化に詳しい外国人講師による「英語で学ぶ平家物語」講座や「母国に関心を持ってほしい」留学生や「子どものころから多様な文化に関心を持ってほしい」保護者らを対象とした国際交流企画について報告しているが、こうした語学学習の場で英会話力の向上と多文化交流の場づくりとの両立をいかに模索したらよいかを考えていくことが、いま生涯学習に求められている課題の一つである。

本稿で取り上げるグローバルセッションは、早くから国際化に取り組み始めていた亀岡市において、1999年に市民向けの英語学習講座として開講した。現在は英語を第二言語として学んだ非英語ネイティブを含む外国人たちと日本人参加者とが互いの文化的差異について語り合う多文化交流の場として機能している。また同セッションは、教養として未知なる文化を知り、異文化交流のスキルを培うだけでなく、多様な文化的背景をもつ参加者が日常生活で抱える悩みを分かち合い、新たなつながりを生み出すセルフヘルプグループに類似した機能も備えている。ただし、このような場は、英会話学習講座として始まったグローバルセッションにおいて当初から企図されていたものではなかった。

本稿では、いわば偶発的に生じた生涯学習施設での英会話講座における多文化交流の場を、今後、英会話学習と合わせた多文化共生のための生涯学習の一つのモデルとして提示していくために、まずはこのような「場」がどのような経緯で成立し、参加者にいかなる意義をもたらしているのかについて明らかにすることを目的としている。具体的には、英会話講座グローバルセッション（以下 GS）が、ユニークな多文化交流の場へと変容していく背景と要因、その運営や実施の規則・しくみ、構成メンバーである外国人ゲストスピーカーとコーディネーターを含む参加者全員にとっての意義を明らかにする。

筆者は、1988年から亀岡市の外郭団体の職員であり、2012年3月の外郭団体閉鎖以降は、主宰する NPO の事業のひとつとして、GS プログラムを継続している。閉鎖の1年前の2011年3月に亀岡市交流活動センターを退職後は、大学院で異文化コミュニケーションを研究している。以下のデータは、主として2006年4月から2012年3月に実施した GS の参与観察と参加者らへの聞き取り調査から得たものである。

## 1. 亀岡市における GS の設立経緯とその後の展開

### 1-1. GS 設立の背景

亀岡市は大阪市とほぼ同じ面積をもつが、人口9万3000人弱（亀岡市の人口統計2014年2月1日）の田園都市である。しかし亀岡市は、早くから国際化・国際教育に向けた試みを展開してきた。

同市は、1980年代にアメリカ、オーストリア、ブラジル、中国の四つの都市と姉妹都市提携を結び、1988年には、日本で2番目の生涯学習都市宣言をした。1990年には、第三セクター亀岡都市文化開発機構を運営母体として、オクラホマ州立大学京都校（Oklahoma State University Kyoto Branch：以下 OSU-K）を開校する。当時の市長谷口義久は、筆者によるインタビューに対して「今後は英語が共通語になっていく時代と考え、自分たちが持つことができなかつた、世界に羽ばたく機会を若い人のために作る事が大切であると考えた」（2012年11月）と OSU-K 設立の経緯を語った。

開校当時の OSU-K の教育カリキュラムは、以下のようになっていた。1年目は、オクラホマ州立大学本校で英語集中課程を修了後、2年目（大学1年次）・3年目（大学2年次）に京都校で教養課程を履修する。次に、4年目（大

学3年次)・5年目(大学4年次)は、再びアメリカの本校で専門課程を履修し、卒業する。日米双方での大学教育は、留学への学生の心理的負担の軽減と、日本国内での外国という雰囲気づくりを企図していた。

OSU-Kが設立されると、オクラホマ州立大学本校の教職員とその家族が亀岡市内に移住し始めた。これを受けて同市は、彼らによる市民対象の英会話講座を開講する。しかし1996年には生徒数の減少により、OSU-Kは閉校する。亀岡市はOSU-Kの施設を買い取り、財団法人生涯学習かめおか財団に経営を委託し、1996年に市の外郭団体として亀岡市国際センター(2001年に亀岡市交流活動センターに改称)が発足する。その後は、市民向けの生涯学習施設として多様な事業を展開していくことになる。当時、他のアメリカの大学の日本校の閉校が相次いでおり、OSU-Kの閉校に対して市の内外から多くの異議が寄せられていた亀岡市は、市民が活用できる形にOSU-Kを再活用する方途を見つけることが急務であった。1999年当時の亀岡市国際センターにおける生涯学習プログラムは、春学期・夏学期・秋学期・冬学期の4期に分かれ、多彩な講座で組み立てられていた。

時間	火曜日			水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
10:30~12:00	Team 初級 ¥21,000					中級 FA ¥22,500	中級 SA ¥21,000
13:15~14:45	初級 TP ¥21,000	中級 TP ¥21,000	KINDER (2~3歳) ¥13,000	中級 WP ¥19,500	上級 THP ¥21,000	上級 FP ¥22,500	キッズ ¥7,000
17:40~19:10			KINDER (4~6歳) ¥13,000	World News ¥19,500			
19:30~21:00	上級 TN ¥21,000 ガレリア			中級 WN ¥19,500 ガレリア	初級 THN ¥21,000 中央公民館	初級 FN ¥21,000 ガレリア	

(図1: 1999年の英会話講座カリキュラム)

なかでも目玉となった英会話講座は、16講座が開講していた。キッズクラス以外は1.5時間で定員15名(2002年1月から定員10名に変更)、受講料は1レッスン1500円であった。

なお、OSU-Kへ入学した学生は1990年から96年までの6年間で延べ600名に上り、96年閉校後もオクラホマ州立大学本校に在籍し、約200名が卒業した。96年閉校後の本校と学生・保護者との連絡は、亀岡市国際センター職員が行っていたため、本校との関係は継続し、OSU-K閉校後、大学教職員は帰国したが、1999年7月までの英会話講座は、本校から派遣された常勤英会話講師が担当していた。

本稿が対象とするGSは、1999年に亀岡市国際センターでの生涯学習英会話講座の一つとして新たに開講されたものである。同センターでは上述した多彩な英会話講座を開講していたが、受講者どうしの交流が可能となるような英会話講座は存在しなかったため、新たな英会話講座を模索していたところ、受講生の一人より横瀬和治を紹介され、1999年7月に夏の特別プログラムのゲスト講師として招聘することとなった。横瀬は、仙台でNeoALEXという学習塾を経営し、大人と子どものための英語でのセッション(グローバルセッション)を開講していた。招聘直後の8月に、横瀬のレクチャー参加者を中心に少人数の「グローバルセッション研究会」を発足し、「日本人が外国語を学ぶためには対話方式が最も有効である」という横瀬の説を踏襲した実践が開始された。2000年夏にも横瀬を招聘している。ネイティブスピーカー、コーディネーター、受講生の3者で討論を進めるGSの展開は、3つの時期に区分できる。第1期は1999年9月から2004年12月までの時期である。GS開設当初は上記のように「グローバルセッション研究会」として、月に2回程度の不定期開催をしていたが、2000年9月から学期に7回の常設講座を併設し、受講生を公募することとなった。さらに2001年5月には週1回(3期制)の常設講座に変わった。この時期には、英会話講座の常勤講師がゲストスピーカーを務め、並行して月1回開催していた研究会のメンバーがコーディネーターとテキストの選出を担い、公募により集めた固定的な受講生を対象に実施していた。2004年12月までの2年半で計68回のセッションが開かれた。また研究会は1999年8月から同年までに43回開かれた。第2期は、2005年1月から2012年3月までの時期である。週1回の受講生の公募を中止し、しばらくは年6回から8回の不定

期開催であったが、2009年4月からは、現在と同様の月1回の定期開講となった。第3期は、亀岡市交流活動センター（2001年に国際センターから改称）がガレリアかめおか（財団法人かめおか生涯学習財団）に合併後の2012年4月から現在までの時期で、筆者がNPO事業のひとつとして主催している（2014年8月で266回目）。

## 1-2. 英語学習から多文化交流の場への変容

1999年の横瀬のレクチャーをもとに開講したGSは、「コミュニケーションを通じて自然に英語を身につける」方法を新しい英会話の方法として打ち出した。主な特徴は、以下の二つである。

第一に、ゲストスピーカーとコーディネーターが英語テキストにもとづいて会話する内容を汲み取り、対話の仕方をまねることで英語を身につけるという方法である。第二に、「当てない」「黙って聞いていても良い」の原則の下で、話したくなかったときに会話に入ることを推奨する方法である。渡米中に状況的学習論を学んだ横瀬が考案したオリジナルなモデルでは、参加者が習得を目指す中核的な実践として、英語を母語とするネイティブ英語話者の英会話が想定されており、参加者は対話の場へのコミットメントを継続することで、英語ネイティブのような英会話力を培うことが期待されていた。

ところが、上記のように亀岡市という小都市で開催されたGSでは、参加者が目標としうるネイティブ英語話者のゲストスピーカー（以下はゲストとする）の継続的で十全的な参加は見込めなかった。亀岡市国際センター（亀岡市交流活動センター）では、設立以来、異文化交流プログラムを数多く開催していたが、GS主催担当者である筆者は、その中のホームステイプログラムに応募してきた日本在住の外国人参加者の中に、英語を話す人が多数存在していることに気づき、GSのゲストとして声をかけ始めた。亀岡市は京都市へのアクセスが良いとはいえ、毎月外国人ゲストを招聘するのは容易ではなく、また、ネイティブ英語話者に声をかけても全員が興味を持つわけではなかったのである。

この結果、次第に「ネイティブ英語話者」という枠組みは取り払われ、多様な経歴・背景を持つゲストがセッションに参加することとなった。2006年4月から2012年3月に開催した62回のGSのうち、英語を母語とするゲストスピーカー（以下便宜的に、英語ネイティブと呼ぶ）は、アメリカ出身者（12名・37回）・イギリス出身者（2名・2回）を含めて14名（39回）であった。その他は、英語を母語とせず、第二言語として習得したゲスト（以下便宜的に、非英語ネイティブと呼ぶ）で、出身国はイタリア・ブルガリア・フランス・インドネシア・ネパール・カンボジア・中国・バングラデシュ・日本・カナダ・ブラジル・南アフリカ（2回・1名が複数回参加）の12カ国に上る。

また、二つ目の特徴である「当てない」「黙って聞いていても良い」も、日本人の引っ込み思案な性格に配慮し、英語を話す緊張感を軽減するものとして、横瀬が取り入れていた方法を踏襲していた。

2011年に実施した参加者へのアンケート（45名中、回答27名）によれば、「当てない」や、「聞いているだけでもいい」などの方法を知った上で受講した人が74%（22名）と大半を占めた。また、受講理由を書く欄には、先に述べた「心理的な負担の少ない英語の学習方法」に加え、「黙って座っていても、さまざまな外国人から面白い話が聞ける」といった異文化体験の魅力が多く含まれていた。ここに英会話講座として始まったグローバルセッションの位置づけが、当初の目的から変容していく契機がある。すなわち、英語ネイティブの継続的な参加が見込めない亀岡市の立地条件が結果として、非英語ネイティブをふくむ多様な外国人ゲストを招聘することとなり、そのようなゲストの多様性と、心理的な負担の少ない学習方法を選んだ参加者の存在が、グローバルセッションを「英語学習の場」から「異文化交流の場」へと転換させていくのである。次節では、GSが具体的にどのようなしくみで成り立ち、運営されているのかについて検討していきたい。

## 2. グローバルセッションの仕組みと場の構造

### 2-1. GSの構成メンバー

本章では、主に第2期にあたる2006年4月～2012年3月までの期間を対象に、セッションの構成メンバーであるコーディネーター、ゲストスピーカー、参加者の3者の役割を明らかにする。コーディネーターは、主催者が参加者のなかから英語でゲストと対話することを条件に公募して選出した各回のGSの責任者である。主な役割は、①

最初にゲストに質問を投げかけ、参加者との対話の糸口を作ること、②参加者の理解が不足している場合に、簡単な英語に言い換えるようゲストに促したり、日本語で概要を伝えることの二点である。ゲストは、英語で話題を提供する者である。彼らは開催日の1週間前までにスピーチ内容の英文テキストを、主催者を通して参加者に送付する。それにより、参加者は事前にテキスト内容を理解する機会が保証される。ゲストの選択は、主催者側に任されているが、一度参加した後も興味を持ち、再度の参加を自主的に申し出る者もいた。英語ネイティブの職業は、JETプログラム（Japan Exchange and Teaching Program）のメンバー（英語指導助手・国際交流員）や、英語指導助手終了後の大学院生や英会話学校の教師であった。非英語ネイティブゲストには英語教師もいたが、留学生やその家族が多く、必ずしも英語に関わる仕事をしているわけではない。また、ゲストには謝礼として5000円が支払われている。

参加者は、参加費600円を支払い、事前に送られてくるテキストの内容を読んで興味を持った回に参加する。参加者数は2006年の平均参加者6名から2012年には11.33名に増加し、第3期の2013年には、平均15.5名となった。リピーターも多く、2006年度からの継続参加者7名は、2014年現在も参加している。年齢は、退職後のシニア層と40代が大半を占める。参加者の職業は、元社マンや輸入販売者、現役の英会話講師・教員など英語に関わる仕事に従事している／していた人と、これまで英語に関わりを持たなかった層のいずれも存在する。GSは、センターの他の英会話講座とは異なり、受講者の英会話レベルを分けていないため、参加者の英会話レベルは初級クラス相当から上級クラス相当までいる。また後述するように、ゲストとして参加した外国人が一般参加者としてGSに参加するようになることも多い。調査期間の62回のゲスト総数26名中11名が後に一般参加者として参加した。GSの終了後は、主催者側から対話の内容を書いたレポートを登録メンバー（参加者を含む）全員に送付してきた。「行けなかったが内容がわかり、おもしろい」「話者はイニシャルで書いてあるが、参加していればわかり、ファイルで保存している」などの連絡が時折ある。これも繰り返し参加する理由のひとつと言えよう。

## 2-2. グローバルセッションにおける対話

次にGSがどのように実施されているのかを明らかにする。以下の事例は、第3期の2012年5月26日に行われたセッションである。タイトルは「A silent pride in dependence: The path to adulthood in Japan」である。ゲストのスピーチ内容を配布テキストの和訳から一部を抜粋する。

「…（前略）…ある時、1人の女性が憔悴して語る。「毎週末に息子の家に行き、彼のための掃除をしている」と言うのだ。これは、彼女のいつもの週末の仕事らしい。早朝に起きて、子どものためにお弁当を作るのは、ある種の文化的差異としてまだ理解できる。しかし、成人した男性、しかも1人で住んで居る家を掃除するというのは、少し常軌を逸しているようにみえる。身の回りを掃除するのは大人としての責任であり、人生の避けられないひとつの現実である。母親としての責任は、成人した子どもが家を出た時に終わらないものであろうか？この時点で彼は自立を学んでおくべきだし、このようなことは彼自身で終わりにしておくべきだった。もっと言うなら、もし独身の男性がこのような状況で養育されて結婚すると、母親への依存行為は、妻への期待となってしまうはずである。…（後略）…」

この日のゲストは、ベトナム系のアメリカ国籍の女性E（30代女性）であった。彼女がスピーチを終えると、次のような対話が始まった。対話の一部を抜粋する。コーディネーターは日本人女性（60代）であった。

## (前略) 掃除の話題から

- コーディネーター : 自分の部屋の掃除を子どもがするのは、普通ですか？
- ゲスト E : 母が言うには、「部屋をきれいにしておきたかったら、自分の責任で掃除をしろ」と。
- アメリカ人 M (20代女性) : アメリカでは、学校の掃除は掃除の人が掃除をし、学生はしません。
- ゲスト E : 日本では、学校で子どもは掃除をするのに、家に帰ったら自分の部屋を掃除しないのはなぜ？
- 日本人 S (50代女性) : ほとんどの男の人は家では料理をしないでしょう。たぶん忙しいからでしょうね。それでお母さんは、子どもの面倒をみるだけでなく、夫の面倒もみなくてはならないのです。
- 日本人 F (60代男性) : 私が台所にいると、妻に「そこは私の仕事場よ」と言われました。それ以来、家では何もしなくなりました。
- コーディネーター : 離れて住んでいる子どもの家の掃除をするのは、普通なんですか？
- アメリカ人 M : 卒業したら子どもを放り出すのはアメリカでは普通です。
- ゲスト E : もし私の母が私の部屋を掃除したら、私は母を追い出し、自分で掃除ができなかったらメイドを雇うわ。
- アメリカ人 M : クリスマスにアメリカの自宅に戻ったら、母が私の服を洗濯しようとしたので「ノー、ノー」と言って、私は断りました。母に自分の服を触られたくなかったからです。
- 日本人 K (60代女性) : 日本で子どもの家を母親が掃除をするとして、それは母親の問題だろうか？それとも子どもの問題？母親と子どもの共依存のような気がします。

## (後略)

GSは通常、コーディネーターからゲストへの質問から始まる。上述したように、本セッションでは「当てない」「黙っていても良い」というルールがあるため、コーディネーターから誰かに質問を割り振ることはないが、多くの参加者は自主的に会話に参加する。この日のセッション(1.5時間)の参加者数は21名であった。全体として81回の発言があり、その内訳は、ゲスト24回、コーディネーター6回、他の参加者(19人)は延べ51回であった。ややゲストの発言回数が多いとはいえ、それでも全体の3分の1に満たない発言数であった。GSは、講演や講義ではなく討論の場であるため、ゲストと参加者の一問一答ではなく、誰の問いかけや意見にも応答することができる。

この事例では、コーディネーターによる「親が離れて住んで居る子どもの部屋を掃除するのは普通だろうか？」の問いかけに、ゲストEではなく、同じアメリカ人Mが「アメリカの場合、卒業と同時に放り出すのが普通だ」と答えている。またコーディネーターの発言回数が少ないのは、コーディネーターは討論のきっかけを作り、難しい英語を容易な英語に直すなどの手助けはするが、話題や討論を操作することはなく、その日の参加者たちの関心や場の成り立ちにゆだねるからである。ただ、ゲストが無意識の内に「先生」となり、結果として考えを押しつけてしまう傾向が見られる時は、コーディネーターは、ゲストと参加者の対等性を確保する役割もある。

また、参加者たちはそれぞれの文化や国籍を代表して意見を述べるがあっても、あくまで個人の見解を述べているに過ぎないという意識を共有している。例えば、上述の対話でも、それまで「アメリカ人は卒業すると自立心が芽生え、母親の過干渉を避ける」という意見を述べていたアメリカ人参加者Mも、日本人参加者Sの「夫の母も土産を持たせて帰らせる」という意見を受けて、「私にもアメリカ(の母親)から小包が届く」と述べている。

このようなGSへの関わり方の態度(暗黙的なルール)は、互いの英語に対する関わり方にも影響を与えている。上述したように、参加者の英会話力にはばらつきがある。そのため、ゲストを含めて易しい単語や短い文体が続く傾向にある。また、文法上の間違いを誰かが指摘や修正することもめったにない。意図する内容が伝われば、対話は中断されることなく続き、誰かの発言からゲストや他の参加者発言が理解されていないことに他の参加者が気付けば、わかりやすく内容を言い換え、質問においてさりげなくフォローを行うことが広く見られる。この点にも、GSが「正しいネイティブの英語を身につける」という目的から、互いの文化的な差異を理解し、分かち合うことを目指すものへと変化してきたことが見て取れる。次章では、このようなGSの場とは、ゲストも含む参加者にとって、どのような意義のある場となっているかを検討する。

### 3. グローバルセッションの「場」の意義

#### 3-1. ゲストにとってのグローバルセッション

第2期（2006年4月～2012年3月）に行われた全62回のGSの発表タイトルと内容を分析すると、1）外国人からみた日本や日本文化、2）自国や自国の文化が最も多く、全体に占める割合はいずれも29%であった。その他の話題には、国際的な時事問題や、異文化理解や教育に関わる課題などがあった。

発表者の出自によってGSで発表する内容にはちがいが見られ、アメリカやイギリス出身者の多くは、日本や日本の文化に対する眼差し、あるいは日本で経験し感じた違和感について発表する傾向にある。これに対して、アジア諸国や中近東出身者たちは自国の文化について紹介することが多かった。一例をあげれば、2006年のゲストは、6名全員が非英語ネイティブゲストで6名共に自国の文化について語った。また、2009年のゲストは11名がアメリカ人で1名がイタリア人であった。イタリア人以外は、日本のアルコールとマリファナ問題などさまざまな話題を取り上げた。

次にまず、非英語ネイティブゲスト2名を取り上げ、簡単な経歴とグローバルセッションでの発表内容を説明し、彼らにとってGSがどのような意義を持つ場になっているのかを検討したい。

**【事例①】**バングラデシュ唯一の丘陵地帯であるチッタゴン丘陵地帯出身の少数民族出身で仏教徒であるゲストAは、2006年に同じ民族出身で、当時日本の大学院で学んでいた夫と結婚し、彼の家族として来日した。ゲストAも大学の医学部を卒業し、大学病院で理学療法士をしていた。彼女は、ベンガル語・英語・日本語・部族の言語であるチャクマ語を話す。グローバルセッションのタイトルは、「バングラデシュの歴史と、少数民族ゆえの差別のある現状について」であり、生まれ故郷であるチッタゴン丘陵地帯が英国植民地時代から現在までに経験した政治史とチャクマ族が直面して来た差別的な現状について語るものであった。（2011年5月7日の記録：第2期）

**【事例②】**中国の農村出身のゲストBは、出身省の大学・大学院を修了後、JICA奨学金を得て日本の国立大学大学院に進学のため、2002年来日した。その間、大学内の日本語講座・市内の日本語学校で日本語学習を開始し、2年半の間に日本語能力試験1級に合格した。中国に一時帰国した後、関西の私立大学大学院に入学し、政治哲学を専攻している。話題は「中国の英語教育（英語をどう学んだか）」であった。（2012年12月15日の記録：第3期）

この二人をふくむゲストには、GS終了後、インタビューやメールでGSでの体験について感想や意見を求めてきた。2012年5月に改めて、GSの第2期に参加した非英語ネイティブゲストそれぞれ15名を対象にGSに参加した感想や意見に関する自由回答方式のアンケート調査を実施した。また、第3期にかかる2012年4月～2013年3月（13回・5名）には、終了後、メールで質問をした。その結果を整理すると、彼らは、大きく以下の三つの感想を述べる傾向にあった。第一に、自国の文化や政治社会的な現状を紹介し、理解を得ることができた。第二に、日頃の疑問や悩みについて語り合い、その解決の糸口を見つけることができた。第三に、今後の友人作りや居場所となった。

例えば、バングラデシュ出身のゲストAは、これまでの日本人の友人との対話では、日本とバングラデシュの文化の比較に話題が終始し、少数民族チャクマの現状を語る場がなかったという。GSでは、チャクマ族として直面した差別のなかで、社会的な上昇を勝ち取る手段として英語力を身に着けたことを語ったが、多くの日本人参加者からの共感的な理解を得たことがうれしかったと述べた。

また中国出身のゲストBは、それまで「留学生だから英語ができて当然である」との誤解のもとで母国での英語学習について話す機会がなかったと述べ、中国の英語教育が社会的上昇のための必要条件となっていることの問題点および来日後の「話す英語」への習得過程について述べることで、日本と同様の受験勉強型の英語と「話す英語」を身に着ける困難さについて日本人参加者と類似しているとの理解を得ることができたと語った。

このような意見が出された背景には、第2章で述べたGSの場の構造が深く関係していると考えられる。GSには、多様な出自を持つ人々が参加者として存在し、単純に「日本人」対「外国人」という構造になっていない。実際に、調査期間の62回の内、34回に、のべ54名の日本人以外の参加者があった。

次に英語ネイティブゲストにとってのGSの意義を検討したい。

【事例③】アメリカ国籍のゲストCは、JETプログラムの英語指導助手として来日し、関西地方の地方都市に赴任後4年目にゲストとして初めてGSに参加し、今回は2回目になる。大学時代に日本語に興味を持ち、短期ホームステイプログラムに参加した経験がある。テキストは、「青い眼」というタイトルだった。彼は教師として赴任した1年目から「なんで青い眼なの？」と聞かれ続け、「日本人は視野が狭い」と思い始める。赴任3年目になると、その事を聞かれることが辛くなり、日本に対する魅力までだんだん失っていった。4年目になると「科学的理由で説明してみよう」と思い立ち、アメリカ人の子どもが「なぜ、空が青いの？」と聞くことと、「なぜ、あなたの目は青いの？」と聞くことが同じだと思えるようになったと語る（2012年10月13日の記録：第3期）。

上記のゲストCは、目などの身体的事象への言及をタブー視する文化に育ったため、身体的事象について指摘されることに拒否反応があること、しかしそのような個人的悩みを教師の同僚や生徒たちに尋ねることもできず、長らく日本社会に違和感を覚えてきたことを語った。ところがGSの参加者から、青い目に対する指摘は「きれいであるという意味であろう」とコメントされ、参加者全員で文化のちがいの存在をわかりあう体験ができたことが素晴らしいと語る。

第2期の英語ネイティブゲストの職業は、アメリカ人12名（英語指導助手10名・国際交流員2名）・英国人2名（国際交流員1名・英会話教師1名）と偏りがあり、そのせいか、アンケートには「黙っていてもよい」ではなく、参加者全員が討論に参加する方法を考えるべきだとの意見もみられた。また、上述したように、「外国人から見た日本や日本文化」を討論のテーマとするものが多く、その理由としてアメリカ人ゲストは「日本人は（アメリカの文化よりも）自国の文化が外国人からどのように思われているかを知りたい」とアンケートに回答していた。このように英語ネイティブゲストは、最初は英会話力の教育や日本／日本文化に対する客観的な意見を述べる役割を意識して参加する者が多い。しかし、二回目の参加でCが日本での暮らしで抱えた悩みを打ち明けたように、英語ネイティブゲストたちも継続して参加すると、「教える」役割から離れ、対等な立場で意見を交わす、悩みを相談しあうことに意義を感じるようになる。たとえば、ゲストとして呼ばれた後に、参加費600円を払ってほとんどの回に自主的に参加しているアメリカ人ゲストは、最近では「国際交流員を退職した後の仕事の悩み」について話をした。このように日本にいれば「外人」として一括りにされがちな非英語ネイティブ／ネイティブゲスト双方にとって、GSとはそれぞれの個別の背景や事情を打ち明けたり、アイデンティティを確認したり、日本人の友人たちと暮らす過程で気づいた悩みを解決する「場」として機能しているのである。

### 3-2. 日本人参加者たちにとってのGSの意義

次に、このような多様な背景を持つ外国人ゲストの話題提供にコミットする、コーディネーターをふくむ日本人参加者にとってのGSの意義について検討したい。まず、現在のGSの意義を明らかにするために、GS開始間もなくの第1期と第2期の参加者の参加動機を比較したい。GSが開講して3年目の2002年12月のセッション後の感想には、以下のような記録がある。

「OSU京都校時代から英会話講座を受講していた。私自身は陶芸家なので、英語でその後もOSU-Kの教授達と交流を続けている。英語はコミュニケーションの道具として使ってきて、これからも英語力を維持したいと考えて参加している」（50代男性）

「高校教員をしていて、学校現場で（英語を）教えるはするが、自分の意見を自分のことばで話す機会があまり無かったことに参加して気づいた。このセッションでは、トピックスが毎回変わる。関連性のあるトピックスをつないでいく方法もあるのではないかな。また参加すると、思っていることを話したいという欲求が強く湧き上がってくる」（20代女性）

このように2002年時点では「英語で話す」や英語を効果的に学ぶためのトピックの選び方などに関する意見が大

半を占めた。ところが、GS 開始から9年後の2011年に「GSに参加している理由」をアンケート調査（45名中、27名回答）すると、以下のような意見が主流となった。

「参加者それぞれが何か知らないことを知ろうという意欲を持っているようで、自分も知り得た時は、素直に喜びが湧く」（40代女性）

「最初は、当てないという約束があり、安心して英語の対話を聞いていただけだが何度か参加を繰り返すことで、異文化をもつゲストの新たな一面を知り、それが喜びとなってきた」（50代女性）

「通常の英会話講座では、グループでの受講でもその時間だけの先生対受講生という関係になることが多いが、このセッションでは、ゲストも入れた参加者同士の横のつながりもある」（60代男性）

2011年の参加者には、異文化や異なる文化をもつ外国人の抱える悩みを知ることの喜びや、参加者同士の個人的なつながりに目が向けられてきていることが窺える。既に述べたように参加者にはりピーターが多い。このような継続参加者は、文化について語り合い、個人的な悩みを分かち合ったゲストや他の参加者と個人的な関わりを持ち始めるようになる者も多い。たとえば、母国に帰国したゲストの結婚式に出席する日本人参加者や、生まれた子どもを連れて「一般参加者」として参加しはじめる外国人ゲストもいる。さらに多様な外国人ゲストとの継続的な交流を通じて、それまで関心を向けなかったマイノリティの現状を調べたり、外国に旅行する際に「違いがあるはずだ」と心がけるようになったり、それまでとは異なる、外国人との付き合い方を心がけるようになったと語る参加者も存在する。

また「英語で話すと、日本語で話すよりはっきりと（意見が）言えて楽しい」（60代女性）や、「多文化交流を目的とした場だと正確に自文化を伝えるために、自己のアイデンティティに向き合わなければならないが、GSは英会話向上のための機会として参加するので、身構えずに交流できる」（40代女性）など、個人にとっての英会話向上と多文化交流との第一義的な目的を逆転させたうえで、あくまで前者がGSの目的として設定されていることは、後者のためのある種の大胆さ、気軽さを可能にしているとの意見も聞かれた。

最後にこれまで明らかになった点を総括し、英会話学習の場から多文化交流の場へと変化したGSの社会的意義について検討したい。

#### 4. 考察とまとめ—グローバルセッションの社会的意義

本稿では、亀岡市の国際センターの生涯学習講座のひとつ、英会話講座として開始されたGSが、その後に辿った展開とその特色について明らかにしてきた。GSを亀岡市に紹介した横瀬和治の英語学習方法論では、参加者は英語を母語とする外国人（英語ネイティブ）とコーディネーターとの対話を真似ることで次第に正規の英語を身につけることを期待されていた。しかし英語ネイティブの継続的な参加が見込めない亀岡市の立地条件は、結果として英語を第二言語とするような多様な外国人ゲストを招聘することとなり、そのようなゲストの多様性が、英語学習の場から多文化交流の場へとその価値の転換を生み出していった。

「対話」を重視した新しい英会話学習の場として考案されたGSには、①ゲストスピーカーとコーディネーターが英語テキストにもとづいて会話する内容の概要を汲み取り、対話の仕方をまねることで英語を身につける方法、②「当てない」「黙って聞いていても良い」の原則の下で、話したくなった時に会話に入ることを推奨する方法を採用していた。このようなGSは、通常の英会話講座とは異なり、英会話のレベルや参加動機が異なる多様な国籍・職種・年齢層の人間が一緒に討論する場となって行った。

GSが、通常の英会話講座のように固定的なメンバーシップを持たず、事前送付されたテキストを読んで自主的に参加する形態で運営されていること、また「当てない」「黙っていても排除しない」という原則の下で、会話への参加における自主性が認められていることは、元来、英会話の内容の難しさや英会話が理解できない、あるいは英語で上手く自分の意見を伝えられない日本人向けの対処法として横瀬によって考案されたものである。

しかし多文化交流の場として機能するようになったGSでは、こうした対処法が、①文化的背景の異なる他者の

関心・悩みにコミットし、②文化や慣習の違いにより伝わりにくいことや理解しがたいことを伝えあうために、互いの文化に照らして言い換えたり、補足説明をしあうルールとしても機能するようになった。

たとえば、第2章2節で取り上げた事例では、アメリカ人ゲストの日本人の母親による息子への過干渉についての疑問に対し、日本人参加者からは「母と息子の共依存かもしれない」と彼女の疑問を認めるような発言があった。しかし互いの意見に説明を補足・援護するような討論が進んだ結果、最終的には「アメリカ人の娘の私にも母から小包が届く」など、国籍や異文化の問題として捉えきれない親子関係の実態が対話の中に現れ、そこに相互理解の可能性が模索された。

また多様な背景をもつ参加者からの支援を受けながら、それぞれがGSで話をするのは、「日本人に英語でわかりやすく説明する」「なんとかして英語で意見を伝える」にとどまらず、第3章で取り上げた外国人ゲストたちのように、これまでに悩んだり疑問に感じてきた話を打ち明ける場ともなっており、そのような外国人の悩みに触れて、これまでとは異なるまなざしで文化を捉えたり、外国人とのつきあいの方法を学ぶ場ともなっている。また、GSでは外国人ゲストが話題を提供するが、それに触発される形で日本人参加者もセッションの中で自らの悩みを打ち明けるようになる。たとえば、事例①や②では、非英語ネイティブゲストの語った英語習得の方法や目的、そこでの困難さに触発され、自らの英語習得において感じた困難さを打ち明けた日本人が多かった。また、事例③のような英語ネイティブゲストによる日本／日本文化へのコメントを受けて、身近な外国人との付き合いで感じていた疑問を投げかけたりもする。繰り返しGSに参加することで、このような対話／場の暗黙的なルールを学ぶと、最初は黙って聞いているだけだった日本人参加者や時事問題などの自らの問題とは関係のない話をしてきたゲストも、しだいに日常で感じた疑問や個人的な悩みを打ち明けるようになる。そして、こうした「教える—教えられる」「話す—聞く」の関係ではない双方向的な関係性の構築が、GSを離れた新しいつながりへとつながっていくのである。

このようなGSとは、セルフヘルプグループと類似した機能を持っている。岡(1996)は、セルフヘルプグループの援助特性を他のボランティアグループやグループワークサービスの援助特性と比較し、その「成り立ち」の基本的要素として、①参加の自主性・自発性、②参加者が問題を持った本人であることの二つをあげる。また、「働き」の基本的要素を①わかちあい②ひとりだち③ときはなちの三要素から規定する。これらの「成り立ち」と「働き」の基本的な要素は、互いの文化的な差異や異文化の折衝による悩みを理解し、分かち合い、それをもって日常生活での異文化と新しい関わり方を変えていこうとするGSの場でもみられる。また、セルフヘルプグループにおける非審判的態度や沈黙の容認(cf.野田2004, 向谷地2002)は、語りを通じたエンパワメントを目的しているとの了解の上に成り立っているが、前節の最後で述べたように、GSにおいてはあくまで「英会話力」の取得を目的としているとの了解の上に成立している。

このようにみていくと、GSにおける異文化交流とは、横瀬が考案したユニークな「英会話学習」のルールを対話への参加をめぐる自主性や協調性、自己と他者の意見・態度に対する寛容な姿勢、双方向的で対等なコミュニケーションへと読みかえると同時に、「英会話学習講座」の看板を手放さないことで活発化しているものであるといえるだろう。

冒頭で述べたように、社会的排除としての格差は正という大きな共通の政策課題として生涯学習を議論してきたEU(矢野2004)のように、2000年代以降の日本では身近に存在する外国人との相互理解の「場」作りが、生涯学習の場で期待されつつある。また英会話についても、国際英語論をはじめ、どのような英語を目指すかそれ自体が議論されつつある。

GSでは当初から受講者の英会話レベルを問わず、その具体的な測定方法を発展させてこなかったため、英会話力の向上の達成度については現時点では述べられない。しかし日本語ではなく外国語である英語で話す、それも単数形ではない複数形の英語で伝え合い、互いに互いを尊重するというGSが、多文化共生の場として機能していることは間違いない。今後は、亀岡市のGS開講のきっかけを提供した横瀬の研究メソッドや、高等教育と生涯学習に共に課された異文化理解への期待、英会話講座としてのGSの課題と可能性などを検討していくことを通じて、生涯学習での英会話講座に求められて来た「自己実現」「生きがい」と外国人を含む参加者全員の居場所となりうる「多文化共生」の場づくりとを同時に実現するためのモデルを提示することを目指したい。

## 参考文献

- 藤原愛 2012 「異文化理解に対する学習者の意識調査」『育英短期大学研究紀要』第 29 号, pp.43-52。
- 糸井江美 2005 「学力の衰えと直面する高齢英語学習者」『文教大学教育研究所紀要』14, pp.41-46。
- 2007 「生涯学習として英語を学ぶ人たちのニーズ分析」『文教大学文学部紀要』21-1, pp.171-189。
- 加藤優子 2009 「異文化間能力を育む異文化トレーニングの研究—高等教育における異文化トレーニング実践の問題と改善に関する一考察—」『仁愛大学研究紀要人間学部篇』8, pp.13-21。
- 加藤富夫 2002 「生涯学習としての英語学習 (2)」『北海道教育大学生涯学習教育センター紀要』第 2 号, pp.1-7。
- 川那部和恵 2006 「異文化理解教育における実践的アプローチの可能性」『奈良教育大学実践総合センター研究紀要』15, pp.53-60。
- 溝上由紀・柴田昇 2009 「「異文化理解」と外国語教育—教養教育の一形態として—」『愛知江南短期大学紀要』38, pp.31-42。
- 文孝淑 2000 『日本の社会教育・生涯学習と異文化・異民族間〈共同交流学习〉政令指定都市・川崎市における実践と地域創造に関する研究』一橋大学大学院社会学部社会学研究科博士論文 (www.soc.hit-u.ac.jp/research/archives/doctor/?choice=list&yearID=7 2014 年 8 月 29 日閲覧)
- 本名信行、ベイツ・ホッフア、竹下裕子 2009 『共生社会の異文化コミュニケーション：新しい理解を求めて—英語の多文化化と異文化間リレラリー—』三修社
- 向谷地生良 2002 『べてるの家の「非」援助論—そのままがいいと思えるための 25 章』医学書院
- 牟田京子 2013 「地域の学びの場を創る～年間活動報告」『鹿児島大学生涯学習教育センター年報』10, pp.52-55。
- 中田賀之・木村裕三・八島智子 2003 「英語学習における動機付け：多様なアプローチに向けて」『JACET 関西紀要』第 7 号
- Nerrier, J. P and D. Hon 2009 *Globish The World Over*, International globish Institute.
- 日本社会教育学会編 1995 『多文化・民族共生社会と生涯学習』東洋館出版社
- 野田正彰 2004 『共感する力』みすず書房
- 岡知史 1994 「セルフヘルプグループの援助特性について」『上智大学文学部社会福祉研究』18, pp.3-21。
- 田中宏明 2011 「英語学資力と教育改善モデル—大学英語教育担当者の役割—」『京都学園大学経営学部論集』第 21 巻第 1 号, pp.73-102。
- 鳥飼玖美子 2012 「国際共通語としての英語とは？：多文化社会における英語使用のビジョン (講演会記録)」『金沢大学外国語教育フォーラム』6, pp.3-22。
- 矢野裕俊 2004 「共生社会への展望と生涯学習の課題」『Web Journal』第 4 号 大阪市立大学共生研究会 (<http://co-existing.com/academy/yomimono.html> 2014 年 8 月 10 日閲覧)
- 矢野泉 2000 多文化地域における生涯学習—多文化共生をめざすワークショップを事例として—『横浜国立大学教育人間科学部紀要』I, 教育科学 3, pp.25-35。

## From English Class to Playground of Intercultural Exchange: The Transformation of Global Sessions of Kameoka City, Japan

KOJIMA Kiyomi

Abstract:

Global Session (GS) started in 1999 as an English conversation class for Japanese students to improve their English skills with a native English speaker. However, the monthly sessions, held at a lifelong learning center in Kameoka City, Japan have developed into a “playground of intercultural exchange,” a place where non-Japanese guests, often non-native English speakers, share their varied cultural perspectives on everyday living in Japan. Focusing on the period from 2006 to 2012 and based on participant observation, interviews and various documents of GS, this paper gives an overview of the development, operation and philosophy of GS; additionally, it considers the meaning of the group’s activities as an example of multicultural symbiosis. Each session starts as a discussion in English between the guest and the GS coordinator. Each participant is free to join the conversation anytime or simply to listen. The participants themselves, not the coordinator or the guest, determine when and how to participate. Therefore, GS has certain affinities with peer support groups, where individuals are encouraged to share with others in order to stand by themselves. In GS, the participants share their questions and worries with the guest and each other to mutually form new intercultural relationships.

Keywords: lifelong learning, multicultural symbiosis, English learning class, Global Session, peer support groups

### 「英会話講座」から多文化交流の「場」へ ——亀岡市におけるグローバルセッションの転換——

児 嶋 きよみ

要旨：

グローバルセッション (GS) は、1999年に英会話講座として開始された。しかし、亀岡市の生涯学習施設で行われていた月毎の講座は、「異分化間交流の場」へと発展した。GSでは、ネイティブ英語話者だけでなく、非英語話者のゲストをも含む場となり、日常生活での異文化的観点を共有している。本論では、2006年から2012年に焦点を絞り、参与観察、聞き取り調査、開催報告書等をもとにGSの変化の背景や要因を検討し、生涯学習講座において多文化共生が実現した事例としてGSの意義を考察する。GSは、ゲストとコーディネーター間での英語での対話から始まり、参加者はいつどのように会話に参加するかを自分で決定する。また、GSではそれぞれが自立するために支えあい、お互いを励ましあうセルフヘルプグループと同様に、互いの意見を尊重し、異文化間の疑問や悩みをゲストやその他の参加者と分かち合う、双方向的で対等な関係が実現しているのである。